

2014年6月22日

ブライアン・ブルエット牧師

ピリピ人への手紙：喜びの青写真 #1

今日から、ピリピ人への手紙の学びを始めます。ピリピ人への手紙は喜びの書とも呼ばれます。幸せと喜びの違いを皆さんおわかりでしょうか。このふたつの単語は類義語のように使われますが、そこには大きな違いがあります。少しお付き合いください。今までの人生で一番幸せだったときのことを思い浮かべてみてください。誕生日パーティでしょうか。クリスマスのプレゼントを開けている姿でしょうか。それとも、どこか遠くの国に旅行した思い出でしょうか。ではお尋ねします。それは幸せでしょうか。それとも喜びでしょうか。もちろんすばらしい思い出とは思いますが、パーティが終わってしまえば幸せだった気持ちもすっかり消えてなくなります。一方、喜びは幸せよりも奥深いものです。喜びとは、どんなときにも神がともにいてくださることを確信し、神の愛をひしひしと実感することです。幸せと喜びとの違いはなんでしょう。それは、幸せが状況に左右されるものであるのに対し、喜びはイエスと私たちの関係に基づくものであることです。幸せも喜びも両方良いものですが、このふたつは異なるものです。ピリピの教会に宛てたパウロの手紙には、クリスチャンとして生きる喜びを体験するための構想が描かれています。ピリピ人への手紙は、パウロの書簡の中でもっとも喜びに満ちた書です。全体を通して104節と短い書ではありますが、あらゆるキリスト教理が詰まっています。イエスのご人格と御業、信仰による義認、再臨、聖化のさまざまな側面などがその一例です。また、パウロの書簡の中でもこの手紙には、パウロの個人的な思い入れが特に強く込められています。家でピリピを読む際、パウロが「私」という単語を何回使っているか数えてみてください。この書には、キリストの体における一致の重要性も示されています。さらに、苦難の只中でさえも喜びを見出す術をこの書から学ぶことができます。さて、この書の背景について少し説明します。この書は、パウロがローマでの軟禁生活中に、自身の開拓した教会に宛てて書いたものです。書かれたのは紀元62年ごろです。なぜ書かれた時期にこだわるのでしょうか。それは、イエスの死と埋葬と復活から約30年後を示します。つまり、これらの手紙の読み手には二代目クリスチャンが混じり始めたことがわかります。今日の聖書箇所は、ピリピ1:1-8です。

ピリピ 1:1-8

1:1 キリスト・イエスのしもべであるパウロとテモテから、ピリピにいるキリスト・イエスにあるすべての聖徒たち、また監督と執事たちへ。 1:2 どうか、私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。 1:3 私は、あなたがたのことを思うごとに私の神に感謝し、 1:4 あなたがたすべてのために祈るごとに、いつも喜びをもって祈り、 1:5 あなたがたが、最初の日から今日まで、福音を広めることにあずかって来たことを感謝しています。 1:6 あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。 1:7 私があなたがたすべてについてこのように考えるのは正しいのです。あなたがたはみな、私が投獄されているときも、福音を弁明し立証しているときも、私とともに恵みにあずかった人々であり、私は、そのようなあなたがたを、心に覚えているからです。 1:8 私が、キリスト・イエスの愛の心をもって、どんなにあなたがたすべてを慕っているか、そのあかしをしてくださるのは神です。

3-8節はひとつの段落です。今日このみことばを学ぶ中で、パウロに喜びをもたらした3つの事柄についてお話したいと思います。パウロの手紙から、幸せと喜びの違いを見つけていきましょう。そして、私たちの日常生活にもあてはめましょう。

#1 パウロは、ピリピ教会の人々との協力関係や友情に喜びを見出した。

ピリピ 1:3-5

1:3 私は、あなたがたのことを思うごとに私の神に感謝し、1:4 あなたがたすべてのために祈るごとに、いつも喜びをもって祈り、1:5 あなたがたが、最初の日から今日まで、福音を広めることにあずかって来たことを感謝しています。

3 節。誰にも記憶というものがあります。パウロは、ピリピで過ごした時代のもっとも喜ばしい記憶だけをとどめることにしました。パウロは、第二次宣教旅行中にこの教会を開拓しました。人生いろいろありますが、パウロはこの教会と過ごしたよい思い出だけを思い起こします。

4 節では、私たち次第で祈りがかわることがわかります。私たちは、人や物事が自分の都合に合わせて変わってくれるようにと祈ってしまいがちです。そうすると、他の人に対する恵みという肯定的な気持ちを神が私たちに与えてくださることを見過ごしてしまいます。5 節では、パウロとピリピの教会との間にあるすばらしい協力関係が始まったいきさつをあらためて確認します。パウロがピリピの町にやってきた一日目に川岸でルデヤと出会って福音を分かち合い、ルデヤがヨーロッパで初めてキリストを信じる改宗者となったできごとです。その一日目に何が起こったか、振り返ってみましょう。

使徒 16:13-15

16:13 安息日に、私たちは町の門を出て、祈り場があると思われた川岸に行き、そこに腰をおろして、集まった女たちに話した。16:14 テアテラ市の紫布の商人で、神を敬う、ルデヤという女が聞いていたが、主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた。16:15 そして、彼女も、またその家族もバプテスマを受けたとき、彼女は、「私を主に忠実な者とお思いでしたら、どうか、私の家に来てお泊まりください」と言って頼み、強いてそうさせた。

第一印象は非常に大切です。パウロはとても積極的でした。自分のしていることがキリストのためだと確信していたからです。彼らの協力関係は、経済的な側面もありました。この教会はずっと経済支援を続けており、パウロがローマで軟禁生活を続ける借家の家賃も払っていた可能性があります。こういうわけで、パウロはピリピの教会との協力関係を築いてきたことや今も続く友情に大きな喜びを表します。つまり、彼らとともにいた短い期間、パウロは幸せでしたが、それがパウロの喜びの源ではありません。ピリピの教会が神の栄光に浴していることを知り、パウロに大きな喜びがもたらされたのです。

#2 パウロは神に全幅の信頼を置いていたので、喜びがあった。

ピリピ 1:6

1:6 あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。

6 節は、聖書全体の中でももっとも偉大なみことばです。もう一度読みましょう。神が始めてくださったことは必ず完成させてくださるのです。皆さんのうちに、どのような働きを神が始めてくださったのか、私にはわかりませんが、その内容が何であれ、私たちの人生が終わるときまでずっと神はその働きを続けてくださいます。40 年前、神は OIC を始めてくださいました。今も神が私たちとともにいてくださるという確信を私たちは持ち続けています。私たち個人における神のご臨在はどのようなものでしょう。まず、イエスが死に、私たちを赦してくださったこと、私たちがイエスを主として迎え入れたときに生きる意義を与えてくださったことを覚えます。この時点から、私たち一人ひとりのうちで神の働きが始まりました。今では、聖霊が私たちの内に住まわれ、日々イエスに似た者としてくださいます。神は私たちが完成される日まで、恵みにおける成長を助けてくださるでしょう。神は、ピリピの

教会も始めてくださいました。パウロは、この教会の成長を神が助けてくださると確信していました。皆さんが救われてから、神はどのような働きを皆さんのうちに始められましたか。私たちクリスチャンは、神が救ってくださいました。信仰の一步をまだ踏み出していない方は、人は皆罪人であることと救い主が必要であることを神の聖霊が教えてくださるでしょう。救われたなら、先週学んだとおり、その信仰は善い行いを生みだすはずです。一人ひとり与えられた能力は違います。ただ、6節からひとつ確信できるのは、神が必ず完成させてくださるといことです。私は救われる前、道徳的にも霊的にも間違っていました。自分の罪にまみれて死ぬ運命だったのです。しかし、神の聖霊が罪を示してくださり、罪にまみれた汚れた生き方から立ち直らせてくださいました。36年前にイエスを主としてお迎えしたときには、36年後に説教壇に立って主であり救い主であるお方のことを語っているとは夢にも思いませんでした。皆さんの前に立つ私は、神が与えてくださった義によるのでなければ汚れたぼろ布に他ならないことを重々分かっています。神は私たちのためにご計画をお持ちです。信じられないなら、このみことばを見てください。

エレミヤ 29:11

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——【主】の御告げ——それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

ここまでで、パウロがピリピの教会との協力関係や友情に喜びを見出したこと、また神に全幅の信頼を置いていたことで喜びがあったことを学びました。では、パウロに喜びがあった3つめの理由を見てみましょう。

#3 パウロは、ピリピの教会に対する愛情に喜びを見出した。

ピリピ 1:7-8

1:7 私があなたがたすべてについてこのように考えるのは正しいのです。あなたがたはみな、私が投獄されているときも、福音を弁明し立証しているときも、私とともに恵みにあずかった人々であり、私は、そのようなあなたがたを、心に覚えているからです。

1:8 私が、キリスト・イエスの愛の心をもって、どんなにあなたがたすべてを慕っているか、そのあかしをしてくださるのは神です。

パウロがピリピに宛てたこの手紙はまるでラブレターのようです。パウロは、「あなたのことを思っているからこのような愛情を感じるのだ」と言います。パウロの愛と喜びは、投獄されていても変わりません。彼は獄中で看守たちをもキリストを信じる信仰に導きました。パウロが教会の信徒たちに知ってほしかったのは、彼らがパウロと一緒に投獄されていなくても、その働きの同労者となれることです。事実、信徒たちはパウロのために祈り、支援物資を送り、自分たちの一員であるエパフロデトをパウロのもとへ送ることによって、パウロの働きを支えていました。8節には、神がそのあかしをしてくださるとあります。パウロはピリピの教会を愛していました。それは、イエスが教会を無条件で愛してくださったのに似ています。使徒パウロには、牧師の心がありました。神は、私にもパウロと同じように牧師の心を与えてくださいました。使徒パウロがピリピの教会を愛したように、私もこの教会のお一人お一人を愛していると心から皆さんの前で言うことができます。まだここに来て9ヶ月ですが、皆さんと分かち合った喜びというすばらしい思い出がたくさんできました。私はよく、「今が人生最高のときだね。こうして主にお仕えできるのはなんてすばらしいのだろう」とナンシーに言います。東京で最初に教会開拓をしたとき、誰も知り合いがいませんでした。第一回の礼拝に誰が来てくれるかもわかりません。私たち夫婦は、マンションを何軒もまわって、第一回目の礼拝のチラシを郵便箱に入れました。おそらく、5,000軒くらいにチラシを配布したと思います。日曜の朝がやってきました。私たちは人が来るのを待っては

祈り、また待つては祈りを繰り返しました。とうとう礼拝開始5分前に、一人の女性がやってきました。それが始まりでした。神は私たちを顧みてくださいました。この教会は今では創立30年を迎えます。今でもこの女性のことが懐かしく思い出されます。彼女の名前はホカオさんと言います。彼女はその新しい教会にとってなくてはならない存在となりました。私たち夫婦は、クリスチャンの愛をもって彼女をいつも見ていました。彼女はすでに、神のもとに召されましたが、私はいつか彼女と再会できます。振り返ってみれば、この女性は私に大きな喜びをもたらしてくれました。

結び

パウロがピリピの教会を愛したように、キリストの愛に動かされて互いに愛し合ひましょう。皆さんはラブレターを書いたことがありますか。ラブレターを書くときは喜んでいましたか。私たちは皆、神の家族の一員です。神の愛によって全員が変えらるべきです。イエスは私たちの心にラブレターを書いてくださいました。そのラブレターには、「私はあなたのことを気にかけている。あなたのために死ぬほど、愛している」と書かれています。もしOICに宛てて手紙を書くとするば、皆さんは何と書くでしょう。パウロがピリピの教会に書き送った手紙は、教壇から全員に読まれました。皆さんが書く手紙には、喜びと確信と愛とが満ち溢れているでしょうか。パウロの喜びの源は明らかです。それはイエス・キリストです。イエスがパウロの内にも、ピリピの信徒にも働いてくださいました。この手紙から、ピリピの教会はキリスト中心だったことがわかります。パウロはピリピの教会との絆に喜びを見出しました。教会もまた、パウロがともにいて働いてくれたころの思い出に同様の喜びを感じていたことでしょう。私たちも、信徒同士の関わりの中で、新しい思い出を作っていきましょう。聖書の教えに根差したキリスト中心の教会となって、キリストをたたえましょう。